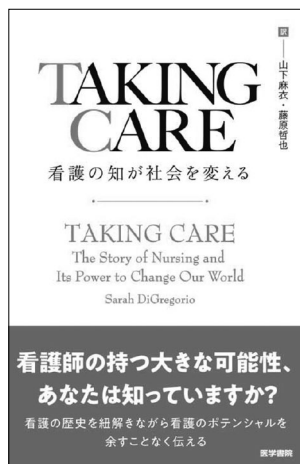


Book Review

TAKING CARE 看護の知が社会を 変える

著：Sarah DiGregorio
訳：山下麻衣、藤原哲也



A5変・288ページ
定価：3,300円（本体3,000円＋税）
発行：医学書院

看護の本質を問う刺激的な書

評者

安部陽子

日本赤十字看護大学看護管理学教授

本書を執筆したのは、看護師ではなくジャーナリストであるサラ・ディグレゴリオ氏である。翻訳したのも山下麻衣氏と藤原哲也氏という看護師以外の専門家である。そして、本書は「看護の大きな可能性へのラブレター」（p.20）である。

著者によれば、医師より看護師が先に誕生した。しかし、「看護学という学問分野は、医師だけがヒーローで看護師を含む他の専門職は脇役に過ぎないという、新たな物語のもとで位置づけられ」（p.46）、長らく周縁化されてきた。

中世には医学校や医学部から女性が排除され、男性エリートだけが医師になることを許された。医師にとって、医療や看護の知識・技術を十分に備えた女性は脅威だった。しかし、医師が医療や看護のすべてを担うことは不可能であったため、知識・技術をもつ女性をヒエラルキーの下層に位置づけると同時に、その役割を「従属的なケア」（p.51）として再定義した。

看護には「社会の枠組みを潜在的に揺るがす力」（p.83）が備わっている。よって、既存の権力構造を維持したい支配層にとっては警戒すべき存在である。ナイチンゲールの看護が受け入れられた背景には、人種や社会階級による差別を含んだ「制約の多い社会構造」（p.83）の再現があり、その結果、「彼女の強調するヒエラルキーと礼儀は、看護に浸透した」（p.82）と著者は主張する。

そして、看護師たちは従順であるように抑圧されてきた（p.217）。それでもなお、看護師たちは目の前の患者やコミュニティのために尽力し、踏みとどまり、時に戦ってきた。本書ではその具体例がいくつも紹介されている。

第9章「集団」では、病院の看護師配置数削減に抵抗する看護師たちの姿が描かれている。「看護師の数が多くいほど、患者が無事に退院できる確率が高くなる」（p.216）ことは多くの研究が示している。しかし病院側は「雇える看護師が十分にいない」と説明する（p.219）。病院は、看護師の労働環境や待遇改善（というより、「看護師を不可欠な労働者として正当に評価」（p.226）すること）によって「看護師不足」が解決できるという視点を否定している、と著者は論述する（p.219）。

本書は刺激に満ち、看護の本質を問うものである。医師に従属する存在ではなく、患者やコミュニティのための改革者として看護師は、看護師以外から期待されている。本書を、ぜひ手に取って読んでほしい。